

『命の尊さは、備わった宝、尊厳の自覚は、静寂の賜。』

大変有り難いことに、私たちには生まれ持った尊い命が等しく備わっています。それは、好き嫌いに関わらず全てに平等の価値が有り、全てに仏さまの要素が隠れています。お大師さまは、その可能性を見いだし、「その身そのままで仏さまである」と表現されました。

一方、その尊厳に対する自覚が有るか無いかで言えば、残念ながら殆どの方が、自信を持ってないか、ことさらに自分の成果を誇るかの両極端な境涯しか持てずにいます。

さて、血の気が多いとは、若いうちには良く言われることですが、人は一生を通じてこの血の巡りに振り回されて行きます。感情の起伏も実際には、血流の不正に準じて暴れ、生まれ持った喜怒哀楽が毒となって苦しみます。

そこで、お釈迦さまは、その仕組みを良く理解され、呼吸の安定から、体内のあらゆる安定を求められました。見聞きし、体感し、思考することも、静寂の中に有れば、貴方にとって大切な妙薬と変わっていきます。

今日、加持祈祷は、願いごとや目的の成就の為に行われますが、元々は、毒虫や病氣から身を守るための対処法として、気を遣って病を直していた事に由来しています。

これらの様に、全てが人生の痛みや苦しみを癒やし、こころ静かに暮らすことで、静寂が身につくとき、全ての感情が仏さまの境涯に気がつくための見方となる様に働きかけます。決して容易な事では無いでしょう。でも、皆目見当が付かない事でも有りません。但し、あきらめが付きません。未練が断ちきれません。自覚するには、多くを捨て去らなければ成らないことも、うすうす見当が付いて居るはずです。

急がず、諦めず、先ずは足りていることに感謝し、その先に延々と続く道が有ることを歓喜し、臨終を終わりと決めつけないよう、この秋の彼岸会を愛おしく迎えましょう。

平成二十七年秋季彼岸会